

日本の暮らし伝える「豆紙人形」



会場には、最晩年のマサコさんが病室で描いた絵が展示されている。マサコさんが「豆紙人形」と名付けた作品は、千代紙やチラシで丹精こめて折った紙人形。着物の少女が遊ぶ様子やウサギの頭など、大正から昭和初期にかけての市民の暮らしをと語っていた母の強さや優しさを、作品から感じ取つほしい」と呼び掛けている。

北九州市出身

手のひらに乗るほどの「豆紙人形」を88歳から作り始め、国内外で個展を開いてきた北九州市出身の故マサコ・ムト（本名・武藤正子）さんの生誕100年を記念した企画展が小倉北区の到津の森公園で開かれている。マサコさんは、市制50年目の節目にあたる2月10日生まれ。そんな偶然が縁となり、初の「里帰り展」が実現した。6月16日まで。

「取つてほしい」と呼び掛けている。
マサコさんが「豆紙人形」と名付けた作品は、千代紙やチランで丹精に折った紙人形。着物の少女が遊ぶ様子ややう伺い職人など、大正から昭和期にかけての市民の暮らしを思い浮かべながら制作したという。亡くなる93歳までに制作した約300点を展示している。

到津の森公園「生きる喜び感じて」

到津の森公園

一男三女の母で専業主婦だったマサコさんは、69歳で夫と死別。直後に右目を失明したが、バステル画の教室に通い始め、88歳からは独学で豆紙人形づくりを始めた。

一男三女の母で専業主婦。娘たったマサコさんは、69歳で夫と死別。直後に右目を失明したが、パステル画の教室に通い始め、88歳からは独学で

「大腸がんなどで入院院を繰り返しながらも、恩い出を懐かしむように作品を生み出していた。たましい母だった」と振り返った。

A Japanese-style diorama featuring a group of figures in traditional clothing standing on a path next to a body of water. A vertical scroll with calligraphy is positioned behind them.

「豆紙人形」は、大正期の暮らしや祭りなどを精巧に表現している

生誕100年記念、初の里帰り展